



●色に関する子ども向け絵本紹介-3

◆『にじをつくったの だあれ?』

(リボンを使ったしかけ絵本)

ベティ・アン・シュワルツ作 ドナ・ターナー

絵 鈴木ユリイカ文 世界文化社発行

2002年 1600円+税

雨上がりの虹を見た子うさぎが「にじをつくったのはだあれ?」と疑問をもち、友だちの虫や動物に聞きました。すると、 TENTUムシは赤、キツネはオレンジ、ひよこは黄色、バッタは緑・・・と教えてくれます。

ページをめくると答えに合わせて色リボンが増えていき、チョウが紫と答えると七色のリボンが揃います。

そして、最後のページを開けると、七色の大きな虹が立ち上がり、子うさぎはだれが虹をつくったのかを理解します。そして、これを読む(読んでもらう)子どもたちは楽しみながら昆虫や動植物の名前と虹の色を覚えていきます。

実は、この絵本の原作『What Makes a Rainbow?』の虹は六色で、日本語版は日本の常識に合わせて七色に変更されています。

私は学生にこの両方の絵本を見せながら、地域や時代が違っていると虹は必ずしも七色ではないことを伝えています。

(垣田玲子)

色点描 赤レンガの本願寺伝道院

京都の西本願寺御影堂門の延長線上の町屋が連なる中に建ち、境内からも見える「本願寺伝道院」。

明治45年(1912)に伊藤忠太により真宗信徒生命保険会社の社屋として建設され、現在は僧侶の研修施設となっている。

イギリスの建物をイメージさせる赤い煉瓦の壁、イスラム様式のドーム、車止めの上にちょこんと乗った幻獣たちが目を引く。

内部公開日に見学に行ってみたが、随所に日本建築の意匠がみられ、階段や部屋には赤や青の単色の絨毯が敷かれていた。

ラクダに乗って日本建築の源流を探すアジアの旅に出ていた伊藤忠太は、仏教のルーツを探す旅に出ていた当時の浄土真宗本願寺派法主、大谷光端と遭遇し、すぐに意気投合したそうである。

同じく伊藤による築地本願寺は昭和9年(1934)に建てられ、伝道院と共に2014年に重要文化財に指定されている。

(橋本実千代)



●大辞泉ひろいよみ 57 一き

金茶：金色を帯びた茶色。金茶色。寄席などで客のこと。

金打：きんちょう。近世、誓いの印として、金属製の物を打ち合わせたこと。武士は刀の刃または鐔、女子は鏡などを打ち合わせた。

金泥：きんでい。金粉をにかわで溶いた顔料。書画などに用いる。こんでい。

銀泥：ぎんでい。銀粉をにかわで溶いた顔料。書画などに用いる。白泥。

金的：きんてき。まん中に金紙を張った弓の的。手にしたいと思っている大きな目標。

金点：一標準気圧下での金の凝固点。

ぎんねず：銀鼠に同じ。

ぎんねずみ：銀鼠。銀色を帯びたねずみ色。ぎんねず色。

銀白色：ぎんはくしよく。銀色を帯びた白色。

金髪：きんぱつ。金色の髪の毛。ブロンド。

銀髪：ぎんぱつ、銀色の髪の毛。白髪。

銀板写真：ぎんばんしゃしん。よく磨いた銀の板に沃素の蒸気を当てて沃化銀の膜を生じさせ、それを感光板として画像を作る写真法。1837年、フランスのダゲールが発明、ダゲレオタイプ。

金風：きんぷう。五行説で秋は金にあたることから秋の風。秋風。(永田泰弘)